

7 小説文を読む

学習日 / 年 月 日

★ A たしかめよう ★

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ささいなことでも父とけんかをしてしまった幸枝は、雨のふる夕方父をむかえに駅へ行った。

五分か六分ごとに、満員の通勤客をのせた電車がホームにすべりこみ、どっとお客をはきだした。そのたびに、幸枝は背のびして、改札口からおしだされる人波のなかに父の顔をさがした。しかし、五台待っても六台待っても、父はすがたをあらわさなかった。

あたりは **A** くらくなり、雨はしだいに本降りになってきた。幸枝は、いらいらしてきた。なんとなく父がかえってくるような予感がして、駅までやってきたのだが、こんなに雨がひどくなったのでは、いつものくせで、お酒をのみにいったのかもしれない。だとすれば、待っただけむだではないか。

そのとき、また電車がつき、人波と人いきれがちかづいてきた。おもいきりのばした首を、右に左にうごかしていた幸枝のほおに、さっと赤みがさした。幸枝は、すぼめたかさをたかくさしあげ、力いっぱいさけんだ。

「おとうさん、ここよ。」

かばんをさげた長身の父が、幸枝のまえにかけよってきた。ふにおちぬ顔だった。

「また、どうした？ なにかあったのかい。」

「なにいてるの。おむかえにきたのよ。」

「そうか。それは、ごくろうさん。」

父は、かみをかきあげ、ちょっとてれくさそうにわらった。父のコートは、ぬれてはいなかったが、すこししめっているようだった。「かさは？ 東京はふっていないかったの。」

「どしゃぶりさ。ずぶぬれになったけど、電車のなかでかわいちゃった。かさをなくしてばかりいるんだもん、ばつをうけなくちゃ。」

ひろいひたいを、父はピシリとたたいた。

「おとうさん、わたし……」

「なにもいわなくてもいい。」

と、父はおだやかにわらった。

「おまえの気持ち、とうさんには、よくわかっているよ。」

しばらく、幸枝は、父のひげのこいほおを見つめていたが、

うなずいた。

「じゃ、いきましようか。かさは、これ一本きりよ。」

「いや、けっこう、とうさんがもう。」

父は、かた手で、小さな黄色いかさのえをくるくるまわし、頭の上でぱっとひらいた。それは、雨のなかにさいいた小さな黄色い花のようだった。

「さあ、いこう。」

父のうでのび、むすめのかたをだいた。

そしてふたりは、恋人こいびとどうしのように、黄色いかさの下でかたをよせあい、雨の駅前広場をゆっくり歩いていった。

(砂田弘「六年生のカレンダー」より)



満員だった電車からおりた人が、まるで波のように次から次へと「ちいへ向かってくる様子」を表しているよ。

(2) A・Bにあてはまる言葉として、最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア がっかり
- イ こっくり
- ウ うっかり
- エ すっかり

A
B



A…完全に暗くなってしまった、ということだね。
B…うなずく様子を表すのにふさわしい言葉を選ぼう。

(3) 線②「幸枝は、いらいらしてきた」とありますが、それはなぜですか。次の文の にあてはまる言葉を、Iは五字、IIは二字で文章中からぬき出しなさい。

おとうさんは **I** にいってしまったのかもしれないから、駅で待っていても **II** なのではないかと思ってきましたから。

I	II
---	----



雨がひどくなったときの、おとうさんのくせは何か読み取ろう。



おとうさんが幸枝に「また、どうした？ なにかあったのかい。」とたずねていることから考えよう。おとうさんは不思議に思っているんだね。

(6) 線⑤「なにもいわなくてもいい」とありますが、父がそう言ったのはなぜだと思いますか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア けんかをしたときのことを言われると、すなおになれなくなるから。

イ 雨がはげしくふってきたので、早く家に帰りたいから。

ウ 自分もあやまらなければならなくなるといやだから。

エ むかえに来てくれたことで、幸枝の気持ちがよくわかったから。



「おまえの気持ち、とうさんには、よくわかっているよ。」と、おとうさんの言葉に着目しよう。